

氏 名 梅 定娥

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第1307号

学位授与の日付 平成22年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「満洲国」文化人古丁の思想的変遷をさぐる一翻訳、
創作、出版

論文審査委員 主 査 教授 細川 周平
准教授 劉 建輝
教授 王 中忱（清華大学）
教授 岡田 英樹（立命館大学）

論文内容の要旨

論文題目 「満洲国」文化人古丁の思想的変遷をさぐる—翻訳、創作、出版

梅 定娥 (文化科学研究科国際日本研究専攻)

本論文は、「抗日愛国」とも「政治立場が反動的」とも評されてきた「満洲国」の代表的作家、古丁の生涯と、その翻訳、創作、編集出版にわたる活動のほぼ全容を初めて明らかにしたものである。古丁の単行本5点(うち創作1点、翻訳4点)をはじめ、多数の創作、翻訳、エッセイを発掘、確認し、周辺雑誌、周辺作家の作品を調査し、近親者、関係者の証言も集め、「満洲国」政府の政策や文化実態の変化と関係づけ、作家の思想的変遷をたどり、その内実に迫りえたと考えている。本論は「序」、第1部「古丁の生涯」、第2部「翻訳活動」、第3部「創作活動」、第4部「編集出版活動」、第5部「結び」の5部で構成する。以下、1、北平時代 2、『明明』期、3、事務会『藝文志』時期、4、芸文書房時期に分けて略述する。

1、北平時期(1932 - 1933)。長春の比較的裕福な家庭に育ち、満鉄の経営する中学、高校で日本語の能力を身につけた古丁は、満洲事変の勃発時に北京へ逃げ、北京大学の学生として、世界的大恐慌と無産階級革命運動の隆盛のまっただなかで一挙に党幹部となり、日本プロレタリア文学作品や文芸理論を翻訳し、中国共産党が導くストライキへの応援と中国プロレタリア文学の理論建設と創作実践に尽力した。しかし、逮捕され、重要な会議の情報を官憲に漏らしたという疑いをもたれ、傷心を抱いて郷里へ戻った。

2、『明明』期(1936-1938)。この時期の古丁の思想状態は「苦悶」と「闘い」の2つのキーワードで示すことが出来る。「苦悶」の原因の第1は、革命運動に失敗したこと。第2は、「満洲国」で復活した「封建」制と植民地支配からの圧迫、第3は、日中全面戦争の開始である。「闘い」の第1は、自分との闘い。酒に溺れ、絶望に陥りそうになりながら、希望を失わず常に自己更新を図ろうとした。第2は、政府筋の「満語」大衆娯楽雑誌の企画を総合雑誌に転換させて『明明』を創刊し、さらに仲間たちと実権を握って新文学建設のための文芸雑誌に転換した。また日本人の出版経営者に協力して、「満語」文芸書を刊行しつつ、旧文芸を批判し、山丁らの「郷土文芸」の主張に対して論争した。第3は、青年を抑圧する礼教を重んじる「封建」制、農民の悲惨な運命と「味を失った塩」のような民衆の状態を描き、それを強いた「満洲国」の政策を、創作を通して批判した。

3、事務会『藝文志』時期(1939-1941)。この時期の古丁を分析するキーワードは「転換」と「漢話」である。「転換」の第1は、個人的心情の変化。毛沢東の「持久戦を論ず」から影響を受け、暗闇の中から自信を取り戻し、「明日」への信念を持ち、着実に前進する詩人になった。第2は、民生部の外局である満日文化協会の応援を受けて、文芸誌『藝文志』を創刊、「魯迅著書解題」を翻訳し、読者の精神改革のための文学、広い視野からの社会批判の文学の方向に進んだ。第3は、作家、作品、読者(社会)三者の関係を反省し、自分をモデルにした知識人青年の内面から底辺を含む市民の生活にテーマを変えていった。

「漢話」については、母語での創作を主張し、政府の日本語教育優遇政策、漢話の注音

符号の廃止に反対した。ただし、単なる保守ではなく、句読点の使用や語彙や表現の開拓のために、自ら夏目漱石『心』の翻訳などに大胆すぎるほどの実験を試みた。

この時期、古丁の創作が各種の文学賞を受賞し、「満人」文芸を代表する作家として日本に派遣されるなど名声があがったが、政策批判や上層部への反抗的態度も目立ち、憲兵に監視されるようになった。ペストの流行から病院で隔離生活を送ったのち、孤立感を覚え、また官庁の再編に伴い、地方に転勤しようとしていたが、病院の生活で文化レベルの低い民衆の実態を改めて認識し、漢民族の向上心と民衆の文化レベルを高めるために、民間人として出版社を経営し、文学の道を守る決意を固めるに至る。

4、芸文書房時期(1941年秋以後)。「背水の陣」で仲間たちと1941年10月に株式会社芸文書房を設立し、計算が下手で営利に疎い古丁が自ら社長となった。印刷技術の制限や統制経済による紙不足など悪条件の中で、民衆の読書生活を養うため、また満洲文学の発展を促すために厳選した書籍を出版、販売していった。

1941年12月、日本対米英戦争が勃発すると、古丁は長期戦を覚悟し、「満洲国」建国十周年行事や「第二建国」の呼びかけ、「大東亜共栄圏」の模範たれの掛け声に応じて、「満人」民衆に傍観的な態度を反省し、積極的に仕事に取り組み、発言しようと呼びかけながら、「満人」の発言権と参政権、対等な関係の実現を要求していった。三度に及ぶ大東亜文学者大会にも参加し、とくに第二回大会では、かねてから主張していた編訳館の設立を提唱し、採択された。日本の敗色が濃くなっても、積極的に国策に協力しながら「民族協和」の内実について正面から批判を行い、また言論統制をかいくぐり、裏側に批判を潜めるやり方で創作、評論を続け、日本が引き上げた後の準備を読者に訴えるようになってゆく。このように社会状況と「満洲国」の政策の変化に応じて古丁の言動に変化は見られるが、「民族協和」のスローガンを利用し、また利用されながら、「大中国」への帰属感、漢語の文学を守り、かつその表現を豊かにする追求、そして「満洲国」の現実批判と対等な関係の実現を要求する姿勢は一貫していた。これは、しばしば言われてきた「面従腹背」とは異なる姿勢であり、「満洲国」の現実をしたたかに生きた作家像が浮かんでくる。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は「満洲国」における中国人作家の代表、古丁に関する最初の総合的な研究である。中国語でも彼の生涯や活動については断片的な論考しかなく、本論文によって初めてこの作家の全貌が明らかにされたといつて過言ではない。古丁は、北平(北京)時期には共産党文化運動の幹部、「満洲国」では下級官吏から出版社店主へ転身し、戦後は中国共産党の文化活動に従事するという転変を重ねた人物であり、第二次大戦後の中国では政治的変動に伴い、評価が二転、三転してきた。「満洲国」における日本語、中国語史料は、いまだ発掘の途上にある。また同国の文化政策、言語政策の実態とその変遷の解明も立ち遅れている。そのなかで、本論文は古丁の生涯と活動、周辺の文化状況の全容を明らかにし、国際状況と「満洲国」の国策の変化と、それに対する知識人の対応を克明に追う姿勢を貫いた。本論文は中国近現代文学史の欠如を埋め、今後「満洲国」の文学・出版文化を研究する上で、参照不可欠な文献となるべき画期的成果と評価できる。

その特長は以下の三点にまとめられる。①関係者へのインタビュー、学籍などの経歴を調査し、古丁の生涯および活動の全体像を明らかにしたこと。創作、翻訳、評論随筆、出版活動とその周辺について、散逸している文献を発掘し、また所在を確認した。ここで初めて紹介された史料は、先行研究で知られていたものの四倍は下らない。②ほぼ全作品にわたって内容を考察し、思想心情の変遷の概要、作風の変化を跡づけたこと。北京から帰郷後の古丁は、幻滅と悲哀のなかから、文学活動を起こし、植民地政策と礼教復活に反抗する姿勢を示した。その背後には中国語文学を豊かにする方法的工夫が重ねられていた、と本論文は指摘する。さらに「大東亜戦争」期には「民族協和」を推進する立場から、これに「協力」しつつも、「大中国」の姿勢を貫き、中国文化を守り、政策の矛盾を指摘し、現実を批判する姿勢を貫いた。本論文は、この錯綜した態度の裡に、「満洲国」政治体制下における作家のありようを読み取っている。さらに③翻訳を二次的産物と見なさず、創作の原点に位置づけたこと。とくに石川啄木、夏目漱石、武者小路実篤、大川周明、吉川英治、また、ゴーゴリ、モーパッサンらの作品の翻訳について、作品の選択、翻訳の方法などを考察し、古丁自身の思想と作風の変化と関連させて論じた。これは中国および日本の研究者が見過ごしてきたことで、本論文で最も念入りに追求されている部分である。明治文学史も教えるとおりの、翻訳は新しい発想、文体の創成に欠かせない。古丁は日本語の知識、日本人教養人との交流を通して、「満洲国」独自の文学創生を見通していた。支配者の言語に肉薄しつつ、民の言語表現を豊饒にしていこうとする古丁の戦略は、最近の翻訳研究の潮流からみても貴重な事例であり、東アジアの近代文学史に新たな光を照射している。

とはいえ、幾つかの弱点も指摘された。まず創作、翻訳、出版という明快な三分野構成ゆえに、かえって叙述が平板になる結果を招いた。また、全般的な政治・言語状況と、古丁の具体的な反応との関係付けに不十分な箇所が残る。さらに、多くの新事実、新史料を発見しながらも、それらすべてを全体構成に組み込むには至っていない。ただし、これらの克服は、本論文の延長上で、今後個別の立証に待つべき課題であり、それによって「満洲国」文化状況の解明に裨益することが期待される。むしろそれらの問題の所在を摘出した点にこそ、本論文の功績を認めるべきであろう。一人の作家を論ずるには、背景をなす言語政策から掘り起こしていく必要があるという展望は、今後の「満洲国」文化研究に対

する貴重な示唆と評価できる。

本論文は「満洲国」文化、第二次大戦後の日中文化の研究に豊かな土台を築いた。審査委員はこの認識を基に、本論文を卓越した業績と認め、学位を授けるに相応しいものと、全員一致で判定した。